

独裁者の転生戦車道

会津藩

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——1945年、独裁者アドルフ・ヒトラー死亡。

だが彼は女となつて転生した。彼自身も予想外な展開であつたが、両親の優しさもあつてヒトラーの心も落ち着いてくる。

そして、ヒトラーの物語はこの大洗女子学園で始まろうとしている
……。

目次

第一章「大洗戦車道始動編」

独裁者 転生	1
また会つたな 親友よ	3
西住姉妹の優しさ	7
戦車発見！	12
寄り道ショップ	17
蝶野教官と山下教官	21
勝利の宣言	25
模擬試合【上】	29
模擬試合【中】	36
模擬試合【下】	41
正体を知る者	44
第二章「練習試合 聖グロリアーナ女学院編」	47
練習試合の決定 作戦会議	51
学院長の訪れ	55
試合相手へ挨拶	55

第一章 「大洗戦車道始動編」

独裁者 転生

——国民は私を恨むだろう。国の栄光とはいつの日か崩壊し、その崩壊へと導いた指導者も國の後を追うだろう。

私も例外ではなく、独裁という形で國の指導者となつた私は、ドイツチユラントを世界の敵へと変貌させた。

しかし忘れてはならない事がある、戦争の始まりや國の崩壊を導いたのも全ては國民である。

國民の熱狂が私を首相の座に入れた。國民の熱狂がドイツを戦争へ向かわせた。

逆にその國民が興味を示さなければ、私は首相などにはなつてはいないと断言できる。

我がドイツチユラントは直に戦争の終わりを迎える、私もすぐにドイツチユラントの後を追い拳銃を右のこめかみに構え、撃つた——

……しかし私はドイツチユラントの後を追う事は叶わなかつた。死んだと思っていた私は、地獄に着いたかと目を開いた。しかしそこは地獄ではなく、ただの綺麗な病室であつた。

私が赤ん坊の姿になつていると気づいたのは遅くなかつた。

目の前には両親らしき男女が私を見ている。

……ここで私は新たな命として生まれ変わつたと理解した。

しかし記憶は全て残つている、何故かはわからないが残つている分には悪くない。

これで私が大人になつても知識は十分というわけだ。

「可愛いなあ、女の子かー」

「ふふつそうねえ……」

……は？ 女の子だと？

まさか、今の私の体は……!?

「ばぶう———!?」

女だというのかあ————!!?

「おお、元気な女の子だなあ」

なんということだ。まさか転生後に女になるとは、これは予想外すぎた……。

現状況だと、これから的人生の選択肢が二つある。

一つは画家や建築家の夢を遂に叶え時を過ごすこと、そしてもう一つは、このままただつまらなく人生を過ごすかだ！

どうすれば良い？　どっちを選べばいいのだ……？

「なあ、キミはこの娘にどう育つてほしい？」

「ふふっ、私はこの娘が人を差別しない優しい子に育つてほしいわ」
……優しい子か。この母親を見ていると、オーストリアにいた母さんを思い出す。

……それにこの父親も、私の父と違つて優しい雰囲気を感じる。
まあ、ひとまず何も考えずに過ごしておこうかな。

——こうして私は第二の人生を歩むことになった。

私の新たな両親は優しく、時には厳しく叱ってくれている。

そうして私はだんだん成長していき、そして私の本当の物語は高校生から始まつていく……。

また会つたな 親友よ

——十六年が経つた。

私の名が「独逸どいつ ひとみ」という珍しい苗字なので、ちょっと驚いた。

だが転生して翌年、私に一人の妹が出来た事は非常に嬉しくなり、二足で立てるようになるほどであった。

そしてわかつた事があつた。この時代では戦車道という伝統の競技があるらしい、乙女の嗜みらしいが……戦車を女が動かすとは予想外だった。

あとわかつた事と言えば、私の家はどうやら代々 戦車道を行つている「独逸流」という家系らしい。

独逸流の主な説明はこうだ。

戦車道には「西住流」「島田流」「独逸流」という圧倒的権力をもつた流派が存在する。

・勝利至上主義者であり、いかなる犠牲があろうとも勝利を求める「西住流」

・臨機応変に対応し確実に勝利を達成する「島田流」

・そして規律を重んじ、相手を敬い勝利を摑む我らが「独逸流」これらの流派は少し対立しているらしい、母さん曰くどうも考えが合わないそうだ。

私も家柄の為、戦車道の道へと行こうとした。しかし母さんは私に言つた。

『ひとつ、戦車道をするのは良いけれど……あなたの道を進んでも構わないのよ？ あなただって人生やりたい事もあるのだし、それにこんな流派の対立なんてつまらないだけよ？』

——と、言われてしまい。私自身は母さんの言うとおりに自分のしてみたい事をしようと思つた。

私は家を出て、大洗の学園艦に移住し大洗女子学園に転校することとなつた。

正直前の高校にも知り合いは多くいたのだが、好きなことをしてみ

たいのも事実だつたもので知り合いや友人達に暫しの別れを告げて、この大洗女子学園に入つた。

校門前には風紀委員長の園みどり子が立つてゐる。

私はこういった規律のあるものは元々ドイツにいたのだから慣れ ている。

「あ、独逸さん。今日も遅刻せずに来たわね」

「おはようございます園風紀委員長。転校して間もないのに名前を憶えていただきて、ありがとうございます」

「風紀委員長だから当り前よ、それにしても学園艦に移住して間もないのに遅刻を全くしないなんて、私的には評価できるわ」

そう風紀委員長はニコリとして言う。こういった人間というのは規律を守つていれば何も言つてはこないのは理解している。

「ほら、そこで立つてたら本当に遅刻しますよ」

「おつと……では風紀委員長。風紀委員長は毎回朝立ちっぱなしなので、お体にはお気を付けください」

「気をつかつてくれてありがとうございます、じゃあ今日も学校頑張つてね」

こうして私は風紀委員長と別れて、教室へと向かつた。

教室に到着し、机に座つた。ちゃんと今日も間に合つたみたいだ。

周囲は生徒達がワイワイ喋つており、私はまだ転校して間もないから喋る相手がない。

「……」

ちよつと寂しいが、一人故の良さもある。

そう、絵を描くことだ。私は生前、画家になるのが夢であつた、しかし試験不合格によつて夢は途絶えた。

しかし私は諦めたわけではない、絶対に画家か建築家どちらかになつてみせる！

「ふんふーん♪」

鼻歌を歌い、私は建築物の絵を描き始める……。

——どこか懐かしい感じがする、まるでアドルフ・アイツと一緒に居た時

と同じ感じがしている。

いつの間にか俺は、鼻歌をして絵を描いている生徒を見る。その描いている絵は、まさにアーティストの絵だつた。

……ああ、そうか。そこにいるのか、我が親友よ——。

……何故だろうか、絵を描いていると懐かしい雰囲気になる。
そう、まるで親友クビツエクと一緒に暮らしていた、あの時のような……。
私はいつの間にか、教室端の席に座っていた生徒を見た。
その生徒は私を嬉しそうな顔でじつと見つめていた。

……やはり、お前なのか。我が親友クビツエクよ。

懐かしき感じのする生徒はゆっくりと私に近づいてくる。
そして私の前に立ち、口を開いた。

「…………久しぶり」

やはりこの生徒は、クビツエクだ。私の最大の親友だ。

ああ、こんなに嬉しいことはあるだろうか？　いや無い。

いつの間にか私は椅子から立ち上がり、クビツエクに握手をしていた。

クビツエクも私の握手に応じ、笑顔で私の手を強く握っている。

「たくさん話したい事があるが、もうすぐショートホームルームが始まる。お昼また話そう」

クビツエクの言葉に対し、私は首を縦に振る。クビツエクは手を振りながら席に戻り、ショートホームルームが始まつた。

……お昼の時間になつた。私とクビツエクは共に昼食を食べている。

ソーセージをかじりながら、互いの事を話し合つた。

やはりクビツエクもこの時代に女として転生していらっしゃい、私の他にも数名が転生してきてるらしい。

クビツエクはその転生者達と知り合い連絡を取り合つていたとい

う。

それも都合のいいことに、全員大洗女子学園に通つてゐるそうだ。ついでにクビツエクの転生した名前は「芥川 栗子」というらしい。「一応聞いたいんだが、他に誰が転生しているんだ?」

「ヨアヒム・フォン・リッベンドロップ、ヨーゼフ・ゲツベルス、テオドール・アイケの三名が転生し、この大洗女子学園に通つてゐる」「アイケも転生したのか? まあアイケは私の部下の中でも優秀な奴だ」

しかし中々濃い転生メンバーだ、絶対に私と再開はするだろうが、実際いたら頼もしい部下達だな。

「そういうえばアドルフ……おつとすまん。ひとみ、お前はあの戦車道の「独逸流」の家系に生まれたんだつたよな?」

「ああ、そうだが……」

「なら、これに入つてみないか?」

ニヤリとした顔でクビツエクは言う、もしやと思うが……。

クビツエクは一枚の紙を取り出してテーブルに置いた。

その紙には大々的に「戦車道」と書かれている。

「私に戦車道をさせる気か? 別に構わないが……条件があるぞ。クビツエク……いや栗子、お前も戦車道に入れよ」

「はつはつは、元々そのつもりだよ。仲間も呼んである」

私の意見関係なく転生者集めて戦車道する気だぞこいつ。別に構わないのだが、後で母さんに連絡しなきやなあ。

——こうして私は、戦車道をすることになるのだが……まだわからなかつた。

これから大洗女子学園の存亡をかけた戦いを始ることを、まだ私はわかつていなかつた……。

西住姉妹の優しさ

——私はクビツエクと共に戦車道へ志願した。

そこでクビツエクは、私に部下であつた転生者のリツベントロップ、ゲツベルス、アイケとの面会をさせた。

しかし困つたのは……、面会した時であつた。

「ハイル！」

アイケが私に会つた途端にナチ式敬礼をしてしまつたのだ。

しかも公衆の面前で行つてしまふものだから、周囲からヒソヒソが絶えなかつた。

その後、事態に気付いたアイケも罪悪感で私に謝罪をしていたが、まあ罪悪感があるならと思い許した。

ゲツベルスとの再会は私にとつても嬉しく、握手を交わした。

私に対しがツベルスは、ドイツが敗北したことや、私が銃で自殺した後に首相となつたがすぐに同じく自殺した事への謝罪を涙ながらに謝罪していた。

しかし私も鬼ではない、ゲツベルスを許して飲み物を奢つた。

ゲツベルスは驚きながらもお礼を言つた。

長く会話した結果、どうやら今後も私の部下であるらしい。

リツベントロップとの再会も、握手を交わし互いの事を話し合つた。

話によれば、以前まで西住流が主の黒森峰女子学園にいたらしいのだが、此処は合わないと感じ大洗女子学園に転校してきたという。

戦車道の経験があるのなら頼もしい限りだ。かく言う私もこの時代に来てからは実家で戦車道の模擬戦をかなり行つていた。

実戦経験が無いとたまに思われがちだが、実は大洗女子学園に来る前まではちよくちよく戦車道を実家で行つていた。

……と、このように再開を果たした私は、戦車道を始める前日に母さんへこの事を報告した。

電話から聞こえてくる母さんの声は、優しく私に言つた。

『何時この道に来るとは思つてたけど……、早かつたわね。ひとみ、や

るからには独逸流の娘として一層奮労努力するのよ』

とのことだつた。母さんは私に頑張れと言つて電話は終わつた。

応援してくれている母さんの為に、私は戦車道を頑張ると誓つた

……。

——そして翌日、戦車道が始まる日に私達転生者は生徒会長の言う通りガレージに集まつた。

周りを見ると、色んな生徒達が少なからず集まつている。

その中に一人、見たことがある生徒がいた。

「あれはもしや……」

私は誰なのか気づき、見たことがある生徒に近づいた。

「そこの方、もしや……みほでは？」

「え、私ですか？」

やはりだ。戦車道の流派の一つ「西住流」の次女、西住みほだ。

私は西住家とは同じ戦車道の家系同士という事で、親睦を深めるため熊本には行つていた。

だから彼女の姉とは友人同士でもある。

穏やかで優しい性格の彼女は黒森峰女学園にいるはずであつた、しかし昨年の全国大会決勝戦で起きた事件で大洗女子学園に転校したと聞いていたが、まさかまた戦車道で再開するとは……。

「久しぶりだな、私だよ」

「ええ!? ひとみさん、なんで此処に!?」

みほは予想外の人物に驚いている。無理もない、なんせ知り合いが目の前にいるんだからな。

私はハハハと笑いながら言つた。

「予想通りの反応だな、まほが大洗女子学園に転校していつたと聞いていたから居るとはわかつてたんだ」

「あつええと、その……」

「事情はまほから聞いているよ、辛い思いをしたな」

「ひとみさん……」

やはり責任を感じているか……、悲しいことだ。まだ若い時にこん

な辛い思いをしているなんて。

「此処は黒森峰女学園でない、大洗女子学園だ。また何時も通り仲良くやろう」

「……！　はい、こちらこそ！」

西住みほは私の差し出した手を握り、握手を交わした。

……やっぱりいい娘じやないか、この娘は。

私もだいぶ丸くなつてしまつたな、やれやれ。転生したとはいえ親が違うところも変わるのか……。

「あつ西住さん！」

リツベントロップが私と西住が会話しているのに気づいたのか、軽く走つてこちらにやつてきた。

「ホナコさん！　此処に転校したつて聞いてたけど、まさか戦車道でまた会うなんて！」

西住にホナコさんと呼ばれているリツベントロップ、こいつの転生名は「季弁下リベンカホナコ」というらしい。なんか変な名前だが何も言わないでおこう、可哀想だからな。

「これからも、よろしくお願ひしますね！」

話によると、どうやらリツベントロップは不良に絡まれている時、西住姉妹に助けてもらつたらしい。

それ以来、二人は仲良くしてゐらしい。リツベントロップも知り合いが増えて良いことだ。

西住はキヨロキヨロと周囲を見て、私達に小声で言つた。

「……正体は、ばれてないんだよね？」

実は西住姉妹は、私の正体を知つている。

理由としては、昔よく熊本に行つたり、西住家からこちらに遊びに来たりしていた。

互いの流派が対立しているとはいっても、独逸と西住の二つは戦車道流派の中でかなりの友好関係にあるらしい。

独逸流は西住流の連勝する戦い方を尊重し、西住流も独逸流の相手を敬うその姿勢に好意を示した。

そして私と西住姉妹は、互いに仲良くなつていき。

次第に転生しているという隠し事をしているのを私は辛くなつて
いた。

西住姉妹の優しさに負けた私は、遂に私が何者なのかを話した。
私は彼女達に嫌われる覚悟で正体を明かした。しかし彼女達はニ
コリと笑顔で言つた。

『嫌うなんてしないよ、だつて今は反省してるんだもんね？』

まほも、このみほの言葉に同調して二人は私の手を握つた。

私は泣いた。ボロボロと涙を流した。そして私は何度も何度も
言つた。

『ありがとう……！　ありがとう……！』

その頃から私の性格が大きく変わったのかもしれない。困つてい
る人を助け、親の為に手伝つて、差別的思考も改めた。

今私の知人が見たら、全くの別人と思うだろう。

私が生まれ変わられたのは、西住姉妹のおかげとも断言できるだろ
う。

「……大丈夫だ。ばれていない」

こうして現在に至る、リツベントロップは先ほど言つていた不良に
絡まれ西住姉妹に助けてもらつた時、名前を言うときに間違つて"
リツベントロップ"と名乗つてしまつたらしい。

それから正体がばれてしまつたとのこと、なんという馬鹿な事だ。
「それなら安心だね……、ひとみさん。お姉ちゃん、私が転校した後
……なにか言つてた？」

「まほの事か？ 確か私が転校する前に電話で" みほの事をよろしく
頼む" だつてさ」

「お姉ちゃん……」

安心したのか、みほはホッと息を吐いた。

まほが怒つてないか心配してたのか、アイツはそんな事みほがして
も怒らないのにな。

——しばらくして、生徒会長の角谷杏が現れた。

私達の前に立つと、杏会長は軽い雰囲気で言つた。

「やあやあ、皆集まつてるようだねえ」

軽い雰囲気だが、少なからず必死な雰囲気も感じる。

しかし身長は小さいのだな……。

「あの、戦車はティーガーですか？ それとも……」

「むむ、今質問していた生徒、そこでティーガーを出すとはよくわかつているじやないか。

やはり我がドイツの戦車が一番、気分がいい！

「うーんと……、私はわからないから、まあ見てみればわかるんじやない？」

と杏会長は言い、ガレージのシャツターを開けた。

そこには鎧びついでいるIV号戦車一両のみが置いてあつた。

「鎧くさい……」

一年の生徒達が嫌そうに言う、まあ確かに鎧びだらけだな。

「……」

すると"みほ"が黙つてIV号戦車に近づいていった。

集中して戦車を見続けた"みほ"は装甲を触つて言つた。

「……装甲も転輪も大丈夫そう、コレでいけるかも」

それを聞いた生徒達は凄いと言わんばかりに"おおー"と声を出した。

やはり"みほ"は凄いな。

『みほは私よりも良い戦車道をする、そんな気がするんだ』

……まほの言つてた通り、みほ自身の戦車道をするのかもしれないな。

——私達の戦車道が始まつた。

大洗女子学園が大会で優勝できるように、私も頑張らないとならんな……。

戦車発見！

——大洗女子学園が戦車道を始め、私も遂に戦車道への一歩を踏み出した。

これからどんな戦いがあるのだろうかと、ワクワクしていたのだが……。

「あ、あの……戦車が一両だけなのですが」

……一両しかなかつた。

どういうことだ、何故一両しかないのだ？ そこはちゃんと集めておくべきだろうが。

「わが校の戦車道は一度廃止されている」

生徒会広報の河嶋桃が我ら生徒達に言う。それでは残り人数分の戦車はどうするんだ？

「というわけでさあ、手分けして探してみてー」

『ええ!?』

杏会長の言葉に生徒会を除く全員が驚き声を出す。

「それじゃあ、頑張つてねえ」

……どうするんだこれ、どうやつて探すんだ？

「よーし、じゃあひとみ！ 早速戦車を探しに行こうか！」

クビツエクは楽しそうに私に言う、なんで楽しそうなんだお前？

私とアイケ、そしてリツベントロップはクビツエクと共に戦車を探しに向かつた。

ゲットベルスは生徒会と残り河嶋広報と何か話したいことがあるそ
うだ。

もしや同じ宣伝系として何か言いたい事もあるのだろうか。

とまあ長い時間あるわけだから、ゆっくり戦車を探していくこと思つていたのだが。

「あつ」

"みほ"とバッタリ会つてしまつた。それに友達らしき三人を連れている。

「ひとみさんも此処を探してたの？」

「みほもか、そつちはどうだ？」

「ううん、まだ何も……」

お互 いまだ見つからずか。

「ねえみほりん？ もしかしてこの人が独逸さん？」

後ろにいたオレンジ色の髪が目立つ生徒が“みほ”に聞いた。

「うん、独逸ひとみさん」

「独逸って、あの独逸流ですか!?」

みほの言葉に、特徴的な髪形の生徒が驚く。

そういえばこの驚いている生徒は、先ほど此処の戦車がティーガーか聞いた生徒だつたか？

もしや戦車が好きなのか？

「私が独逸ひとみだ。君たちはみほの友達か？」

「そう、武部沙織さんと五十鈴華さん」

「武部沙織だよ！ よろしくね独逸さん！」

「五十鈴華です。よろしくお願ひします」

“よろしく”と私は二人に言う、後ろでは先ほどの戦車少女がソワソワしながらこちらを見ている。

「君は先程ガレージで戦車に詳しかった娘か、私は独逸ひとみだ。君の名は？」

私が自己紹介をすると、戦車少女は驚きつつも嬉しそうに言った。
「わ、私ですか!? わつ私は秋山優花里と申します、独逸流の方にも会えるなんて……、私は幸せです！」

どうやらよほど戦車道が好きらしい、表には特に登場しなかつた私にも喜んでくれるなんてな。

「あれ？ そこにいる人は……？」

「ああ、私の友人である芥川栗子だ。偶然大洗女子学園で再開してな」
私が言うとクビツエクは“みほ”に一礼する。

すると“みほ”は私に近づいてヒソリと小声で言つた。
「もしかして、この人も？」

「ああ、生前の親友クビツエクだ。お前の事は説明してある」

「そつか。」

「どうしたのみぽりん？ 急に独逸さんに近づいて」

「ううん、なんでもない。 芥川さん、よろしくお願ひしますね」

「ああ、よろしく」

みほ達と一旦別れて、私達は再び戦車の捜索を始めた。

しかし一向に戦車は見つからず、体力が減り始めていた。

「さ、流石に疲れてきた……」

クビツエクは草むらに座つて言う、それに対しアイケが口を開く。
「まだまだこれからですよ、もう少し探したら戦車が見つかるかもしれません」

「そういうえばゲッベルス宣伝相はガレージに留まつて何をしているのでしようか？」

それには私も首をかしげた。 ゲッベルスは生徒会広報に用があると言つて捜索にはついてこなかつた。

関係ないのだが、正直ちよつと彼が何をしているのか気になつている。

しかしゲッベルスのことだ。 きっと我々に役立つ優秀な事をしているのだろう。

「……んん？ 何か遠くに大きな物体が見えるな、それも鉄っぽい」

クビツエクが遠くをよく見て言う、遂に戦車が見つかるのかはわからぬが、行つてみて損はない。

「よし、行つてみよう」

私達はクビツエクの言つた場所へと向かつた。

「こ、これは……！」

その鉄の塊は間違いなく戦車であつた。 それに車体にはお馴染み鉄十字のマークが付いていた。

「これは、V号戦車パンターか！」

アイケが戦車の正体に気が付く、私達は戦車の発見に喜び叫んだ。
そしてリツベントロップが携帯で生徒会に戦車発見の連絡を取り始める。

「はい、はい……了解しました」

リツベントロップは生徒会への連絡を終えると、私に言つた。

「總統、生徒会が自動車部に連絡をするからその場で待機するようになるとの事です」

「わかつた。では休憩とするか」

それにもしても、よく見るとこのパンターはG型のようだ。
大洗の良き戦力になると良いのだがな。

——その後、休憩中に自動車部がやつてきてV号戦車をガレージへと運び出した。

私達は自動車部の後を追いながらガレージへと戻つてきた。
後々戦車道メンバーも帰つてきて、整列を始めた。

整列を終えると、生徒会広報が戦車の名前を順番に言い始めた。
「八九式中戦車甲型、38(t)軽戦車、M3中戦車リー、III号突撃砲
F型、IV号中戦車D型、それからV号戦車パンターG型。
どのように振り分けますか？」

「んー、見つけたもんが見つけた戦車に乗ればいいんじゃない？」

「では38(t)は我々が、西住たちはIV号で」

そんな決め方で良いのかと思ったが、まあ見つけた戦車は見つけた
者が使うのが一番良いのだろう。

しかしIV号か、黒森峰などはティーガーを多く使用していると聞い
ている。本当にこんなごちゃ混ぜのような戦車達で大丈夫なのだ
ろうか？

……とまあそんな感じで生徒達が乗る戦車は決まっていった。
私達も乗る戦車はパンター戦車に決まった時にゲッベルスがやつて
きた。

「總統、戦車が見つかってみたいですね」

「ゲッベルスか。生徒会広報と何か話していたようだが……？」

私が聞くとゲッベルスはニコリと笑つた。

「実はちょっと河嶋さんに頼まれまして、私の能力を見込んで広報、そ

して宣伝の協力をしてほしいとの事なので協力することにしました」

「それは頼もしいな。 お前の宣伝能力は凄まじいからな」

「お褒めに預かり光榮です總統、しかし……」

「こんなに鎧びついていたら、洗うのは大変でしょう」

苦笑いしているゲツベルスに私は言つた。

「ああ、しかし皆探すので疲れているかもだから、そんなにすぐには洗わないだろう」

そんな会話をしていると、クビツエクが走つてやってきた。

「おーい！ 戦車が鎧びついているからすぐに洗車するつてさー！」

「…………（今やるのかよ）」

…………こんな感じで戦車洗いが始まつた。

その後、私は夕方になるまでゴシゴシとたわしで車体を洗つていたのだつた……。

寄り道ショツプ

——戦車を洗い終えて、生徒達はふらふらと整列に加わって言った。

"みほ"や私達は何事もなかつたかのように至つて元気に整列した。まあ戦車道経験のないクビツエクはかなりふらついていたが……。

「皆ゞ苦労だつたな。後は自動車部に任せる、それに明日には教官のお二方がお見えだ。しつかり休養を取るように、以上解散！」生徒の皆はぞろぞろと家に帰つていく、そんな中私は"みほ"と話をしていた。

「みほ、明日の教官つて誰だと思う？」

「確かに、男女二人つて聞いたけど……」

男女か……。どんな人物なのが気になるが、ひとまず今日の分の疲れを取らなければ。

……ん？ 待てよ、どうして戦車道の教官に男がいるんだ。確かに戦車道は乙女の嗜みのはずだ。本物の戦争なら男が居るのもおかしくはない、しかしこれは戦争ではなくただの競技の一つだ。

もしや私の知つている人物なのか、そうだとしたら同じ転生者の可能性がある。

「なあみほ、男の教官の名前はわかるか？」

「うん、確か山下——」

「あの……、よかつたら寄り道しませんか？」

「え？」

先ほどの少女「秋山優花里」が私達に言つた。

私と"みほ"は突然の誘いに驚いた。秋山もかなり私達を見て緊張していたからな、思い切つて誘つてみたのだろう。

「あつ……嫌だつたら、別に……」

「いや構わないよ。どこに行くんだ？」

私がニコリと笑いながら言うと、秋山は嬉しそうな表情をして言つ

た。

「はい！ ではついてきてください！」

——秋山についていった先には、戦車のパーツや本などが売っている店があつた。

寄り道について來たメンバーは私と"みほ"にゲツベルスやアイケ、そしてクビツエクやリツベントロップ、沙織と五十鈴がいる。

「こんな店あつたんだ……」

沙織がぼそりと独り言を言う。 しつかし沙織の言う通り、大洗の学園艦にこんな店があつたのか、寄り道してみるもんだな。

私達は店内へと入り、各自戦車のパーツを見て回り始める。

クビツエクとアイケは興味津々に色々なパーツを見て、ゲツベルスは店内にあるテレビを視聴、リツベントロップは私と"みほ"と同行している。

「中は結構広いですね」

リツベントロップが言う、私もその言葉に頷いた。

ちらつと向こうを見ると、秋山がプレイしている戦車ゲームを武部と五十鈴がじつと話しながら観戦していた。

私もああいつたゲームは嗜むぞ、パンツアーフロントと言うのだが……。

「ひとみ。 多分お前の考えているものはかなり古いぞ」

「え、マジで？ というか何でわかつた？」

戦車パーツを見ていたクビツエクは苦笑いしながら私に言つた。
おかしい、パンツアーフロントは古くないはず……。

「あはは……」

"みほ"も苦笑いをする。 そんなに古かつたのかあのゲーム、せつかく母さんが私の15歳の誕生日にくれたゲームだつたのだが……。

コソ コソ

……目の錯覚かな。今何か"みほ"の後ろで誰かがコソコソしてたんだが、誰だ?

ジー……

うん、やつぱり誰かいるな。しかしあの姿は、まさか……。

「……ちょっとお手洗いしてくる」

「わかった。じゃあ先見てるね」

よし、みほ達は向こうの商品を見に行つたな。さてと――。私は先程からコソコソしている人影に近づいた。"みほ"は気が付いてないみたいだが、私は正直見てしまった以上放つてはおけない。何故ならば……。

「一体何をしてるんですか"しほさん"、こんな所で……」

「コソコソと"みほ"を見ていたのは、西住流の師範であり"みほ"の実の母親の西住しほだったからだ。

「……」

しほさんは何も喋らない、というよりも何故ばれたのかって顔をしている。

そして平常心を無理矢理保とうとしてゆっくりと立ち上がる。

「い、いつから気が付いてたのです?」

あ、駄目だ。平常心を取り戻せてないぞこの師範。

「つい先ほどからですよ」

「ま、まさかバレてしまうだなんて……」

ほんといい歳してなにコソコソと娘の様子を見に来てんだか、堂々と会えればいいのに。

「というかどうやって学園艦に? へりで来たんですか?」

「貨物船に密かに侵入して大洗の学園艦に忍び込んだわ」

「ええ……」

急に何てことしてんだこの師範は。

「……このこと、みほには内緒ね。こんなこと娘にバレたら……!」

ガクブルとしほさんは震えている。どんな想像をしたんだろう

「…………」

か？

「まあ言わないでおきますから。 でもきちんと帰らないと私の母に
言いますよ？」

「え、 ちょっと待って!? わかつたもう少ししたら帰るから、 元はじめには
黙つててく!?」

——こうして”しほ”さんは”みほ”の様子を少し見てから
帰つた。

なんでもこの間厳しい事言つたから大丈夫かと心配していたし
い。 じゃあ素直に謝ればいいのにと思つたのだが、 そう簡単にいか
ないのが家族つてものだ。

蝶野教官と山下教官

——戦車関連の店に寄り道した次の日。私は何時も通りの時間帯で学園に登校していた。

さて今日は教官がやつてきて直々に戦車道を教えるらしい、しかも男女二人だそうだ。

話を聞くと、女性の方は自衛隊の人物で、男性は知波单学園の教官をしているらしい。

知波单学園というと、最近実行された新たな戦車購入と共に戦術を変え、一気に強豪校へ上り詰めた学園だ。

当然の事ながら戦車道強豪校である黒森峰女学校園、プラウダ高校、サンダース高校、聖グロリアーナ女学院は軽く危険視しているとのことだ。人材も優秀で、その中には西住流と同じ苗字の生徒がいて八九式中戦車で奮戦しているという。

そんな知波单学園の教官が一時的ではあるが、教えに来てくれるのはありがたい。

しかし、肝心の"みほ"がまだ来ていない。まあまだ教官も来ていないから大丈夫なのだが、些か心配になる。

「ふー、間に合った……」

と思つていたら少し急ぎ足で"みほ"がガレージ前に到着した。

「随分とゆっくりだなみほ、何かあつたか？」

「あはは、ちよつとね……」

「どううか教官おそい、焦らすなんて大人のテクニックだよねえ」
何言つてんだと沙織に思つたが、どうやら男の教官も来ると聞いて楽しみにしていると五十鈴から聞いている。

「あれ、何か飛行機がこつちに近づいてくるよ?」

「確かあれは……」

空から接近してくる航空機、それは航空自衛隊のC—2改輸送機だった。

まさか空自の機体で来るとは……、普通にくればいいだろうに。

しかしあ派手に登場したいのは正直理解はできる、かつこいいも

んな。

するとC—2改から陸上自衛隊の10式戦車がパラシュート降下で大洗女子学園のガレージ近くに着陸する。

めちゃくちやダイナミックに動いていると思つていたら、誰かの自動車が10式戦車によつて踏みつぶされた。

可哀想だが運転手、貴方の車の人生は終わつてしまつた。

「学園長の車が!?

副会長が潰れた自動車を見て言つた。え、あれ学園長の車なのか？ 絶対高い車じやないか。

そして10式戦車は私達に近づき止まつた。戦車の中から出て

きたのは一人の女性自衛官であつた。

「ここにちは！ 私が今日からあなた達の教官を務めさせていただく蝶野亜美です。 よろしくね！」

……うん、正直言うと知り合いだ。私の母もこの人と交流がある。

私ともちよくちよく会つてはいるのだが、まだ私が此処にいることは気づいていないらしい。

「戦車道は初めての方が多いと聞いてますが、一緒に頑張りましょ！」整列している生徒一同を見ると、蝶野教官は『みほ』と私がいることに気が付いて目線がこちらに向いた。

「あれ……？ 貴女、もしかして西住師範と独逸師範のお嬢様ではありますせん？」

「あつはい……」

「お久しうぶりです蝶野さん」

私と『みほ』は蝶野教官に挨拶をする。

「戦車道未経験が多いつて聞いていたけれど、お二人が居るのなら此処の戦車道は百人力よ！」

ニコニコしながら蝶野教官は言う。他の生徒達は何が何だか分からずに入つた。

「西住つて?」「ドイツ師範?」

おい待て、誰だ独逸をドイツと勘違いしてたのは。思つてること

が理解できるのがちょっと腹が立つな。

「西住流と独逸流つていうのはね、戦車道でも由緒ある流派なのよ！」
　ちよつ持ち上げるな教官、そもそも私は模擬戦経験しかないんだぞ。

どちらかといえば”みほ”カリッベントロップぐらいだと経験があるのは。

「え、凄い！」「そんな人達がいたんだ！」「かつこいい！」

ほれ見ろ、一年生がキラキラしてるじやないか。これ結構こつちのプレツシャーが凄いんだぞ？ わかつてるのかこの教官は。

「あれ、教官！ もう一人の教官がまだいらつしやらないのですが？」
沙織が蝶野教官に言う、すると蝶野教官は双眼鏡を取り出して校門から先を覗いた。

「……うん、あとちょっとで来るわね」

蝶野教官が言う、すると校門の先から段々と音が聞こえてくる。

キュラ キュラ キュラ キュラ

校門から入ってきて遂に音の正体が判明する。校門から九七式指揮戦車「シキ」が入ってくる。どうやらこの戦車の無限軌道の音だつたようだ。

キュラキュラとガレージに近づいてくる「シキ」は私達の前に来てピタリと停車した。

戦車の中から体格の良い男が現れた。しかしあの顔……、どこかで見たことがある。

「久しぶりね山下さん、知波单の教官生活は順調？」

蝶野教官に「山下さん」と呼ばれた男は、ニコニコしながら蝶野に握手した。

「久しぶりだな蝶野一等陸尉、知波单では順調だよ」

もう一人の教官は私達生徒の前に立つた。そしてすーっと息を吸い上げて大声で言つた。

「私は山下 やました 貞文 さだふみ、本日から暫くの間はお前達の教官となるので覚悟しておけ!!」

山下教官に対し生徒達は動搖している、まあ無理もない。乙女の嗜みである戦車道を男の教官が教えるんだから最初は驚くだろう。すると蝶野教官は生徒達に説明を始めた。

「山下さんはね、元々陸上自衛隊の陸将だったのだけれど、退役して今は戦車道連盟で教官として働いているの。暫くの間此処では戦車の戦術を教えてくれるわ」

なるほど、そんな人が知波単学園の教官だったのか、それならば知波単も強くなるのも道理だ。

尚更一時的とはいえ、大洗の教官になつてくれたのは非常に心強い。

「蝶野教官、最初の訓練ですが何を行ふんですか？」

クビツエクが蝶野教官に言う、蝶野教官はニコリと笑顔で言つた。「もちろん、模擬試合よ！」

『『えええ!?』』

勝利の宣言

——最初の訓練が模擬試合と宣言されたことによつて、周囲が慌てふためいて戦車の操縦方法や砲撃のしかたを、さつそく山下教官から教わつてゐる。

私以外のクビツエクやゲツベルスは、アイケやリツベントロップに戦車の操縦を教わつてゐる。

違う場所では"みほ"が丁寧に一つ一つ沙織と五十鈴の二人に教えてゐる。

しかし最初から模擬試合か……、蝶野教官も中々難しいことを言う。蝶野教官いわく「動かして慣れろ」だそうだが、それだけでは出来ない生徒もいるはずなんだがな。

多分だが蝶野教官もそれは理解しているが、それでも試合をしなければいけない理由があるのだろう。

「……そろそろか」

あと10分程で模擬試合の開始だ。しかし本当に模擬試合など出来るのだろうか、まあ出来なければ意味がないのだが。

「ひとみ、愛華とホナコに戦車の勉強してもらつてきたよ！」

クビツエクが勉強を終えて戻ってきた。補足だが愛華というのはアイケの転生後の名前「手鳥 愛華」の事だ。

何故かゲツベルスは「ゲツベル」という名前だそうだ。なんでも

転生後もドイツ生まれだとか言つてたな。

「どうか、みほ達は既に戦車の準備を始めてゐる。早速こちらも始める」としよう

私達はそのままガレージへと入つていった……。

※ここから史実の名前ではなく、転生後の名前に表記が変わります。

ガレージにて、パンターG型に乗り込んだ私達は蝶野教官の試合開始の合図を待つていた。

久しぶりではないが、再び戦車に乗れたと思うと楽しくなつてくれる。

「楽しそうだね、私は初めて乗るもんだからワクワクするよ」

栗子^{クリッセク}は私に笑顔で言つた。これも補足なのだが、栗子^{クリッセク}は操縦手をやつてもらつていてる。

「そうだな……！」 愛華、砲手の方は出来そうか？」

「全然大丈夫ですよ總統^{ヒューラー}！ これぐらい髑髏師団を指揮することに比べたら簡単すぎます！」

愛華^{アイケ}はニヤリと笑つて言つた。

「ゲツベル、通信の方は出来そうか？」

「私は元宣伝相です。これぐらいは楽ですよ、總統^{ヒューラー}」

ゲツベルは自慢げに私に言う、通信手があの宣伝相ならば非常に安心だ。

「ホナコ、流れで装填手になつたが……」

「お任せください。將軍の砲撃には絶対に遅れません」

こいつはやる気満々のようだな。

『みんな、準備は良いかしら？』

蝶野教官の通信が入る、どうやら試合が始まるとやうだ。

「教官、こちらパンターG型、準備は完了しました」

『……うん、皆準備は終わつてるみたいね』

ここで私は軽い深呼吸をした、氣を引き締めて試合に挑むためである。

そして通信越しに蝶野教官が息を吸い上げている音が聞こえてくる。

『パンツァー・フォー!!』

蝶野教官の試合開始の合図が戦車の車内に響き渡る。

私はキュー・ポラを開き顔を出した。ヘッドフォンマイクを身に

着けていた私は声を大きくして叫んだ。

「Panz^{パンツ}er Vor^{フォー}!!」

私の言葉と同時に栗子^{くりこ}が戦車を動かす、エンジンの音がガレージ内に響き渡る。

そして右手を上げてピンと張り、またしても私は大声で叫ぶ。

「S ie g H e i l !!」
「S ie g H e i l !!」
「S ie g H e i l !!」

我に続いて四人も勝利万歳と叫ぶ。この宣言は早くはない、必ず我らの戦車が勝利を掴む為の宣言である。

そして蝶野教官の指示通り、森の中の開始地点へと向かうのであつた……。

——IV号中戦車が森の中に向かつていく時、蝶野は山下と共に"ひとみ"の言動を見ていた。

「……やはり山下さんの言つていた通り、彼女があの？」

「ああ、転生したヒツトラーだろう」

山下は険しい表情で蝶野の言葉に応える。

「しかし、独逸師範代のお嬢様が元独裁者だつたなんて……」

蝶野は悲しそうな顔をする、しかし山下の表情は先程の険しい顔とは違ひ、多少安心した顔をしていた。

「だがまあ、あれほど性格も変わつてるんだ。やはり良い育ちの影響だろう」

「……私は今の彼女に害はないと信じております、山下さんはどう思われます？」

ニコリと笑つて蝶野は山下に聞く。

「そうだなあ、俺が教官をしている知波单にも転生者は何人かいる。他の転生者もそうだが、今のヒツトラーは害ないと確信できるだろう」

「そうですか。よかつた……」

「さてつ全車両が開始地点に向かつたようなので、我々は見晴らしのいい場所で観戦しますか」

「そうですね、行きましょう。マレーの虎、山下将軍」

いよいよ始まる大洗女子学園戦車道の模擬試合、一同が乗った数々の戦車はそれぞれの開始地点に向かっていったのであった……。

模擬試合【上】

——指示通りの開始地点にパンターG型中戦車は停車した。

試合場所の地図を確認して試合開始の合図を待つ。

するとゲッベルがヘッドフォンを取り、"ひとみ"に報告をした。

「^{フューラー}總統、どうやら全車両は開始地点に到着したようです」

「そうか、ではそろそろ蝶野教官のお声が聞こえてくるだろう」

"ひとみ"が言った矢先に、蝶野教官の声が聞こえてくる。

『みんなスタート地点に着いたようね。ルールは簡単、全ての車両を動けなくするだけ。つまりガンガン前進してバンバン撃つてやつつけければいいわけ!』

「ハハハ、随分ざつくりした説明だなあ」

「逆にわかりやすい間もある」

栗子と愛華が笑いながら言う。"ひとみ"も蝶野教官らしいとクスリと笑う。

『戦車道は礼に始まり、礼に終わるの。一同、礼!!』

「「「「よろしくお願ひします!」「」」

戦車に乗る者全員が礼をした。そして蝶野教官は息をすう一つと吸つて大きく声を出した。

『それでは、試合開始!!』

試合が始まり各戦車は移動を開始した。"ひとみ"達が乗るパンターゲ型中戦車も森の中を進む。

相手には"みほ"の乗るIV号中戦車D型がいるため、いくらパンターゲ型中戦車といえども弱点である車体下部前面などを狙われたらダメージは大きい。

しかし今のところ"みほ"以外は戦車道経験者が存在しない為、"ひとみ"はこの試合は勝てると慢心をした。

——一方、"みほ"が車長のIV号中戦車D型は慎重に森の中を進んでいた。

IV号中戦車D型のメンバーである沙織や五十鈴、秋山が戦車道の経験がある"みほ"が車長をやつたほうが良いと決まったからだ。

"みほ"は双眼鏡を覗き込んで向こうにある橋を見た。橋には相手の戦車はおらず、今なら渡れそうであつた。

「五十鈴さん、向こうにある橋を渡りましょう」

"みほ"は操縦手である五十鈴に言う。

「わかりました。相手の戦車は居ないのでしょうか?」

「遠くを覗いてみたけど、まだ大丈夫そう」

五十鈴は言われた通りに戦車を動かす。すると沙織が疲れたような声で言つた。

「砲弾つて何でこんなに重いのよー・・・・・」

「大丈夫です、頑張つている分は私が相手の戦車に当てる見せますので!」

自信満々に秋山が沙織に言う。そういう事ではないという顔で沙織は秋山を見る。

大洗女子学園の中では戦車道の経験が豊富な"みほ"であつたが、その表情は浮いていない。

他の三人が会話をしている中、"みほ"は黙つてとある事を考えていた。

「・・・・(あの時、角谷会長が私に話してくれた事――)」

――先日、大洗女子学園の生徒会室にて。

角谷杏から放送で呼ばれた"みほ"は、沙織や五十鈴に心配されながら生徒会室に一人で来ていた。

しかし生徒会室には珍しく小山副会長と河嶋生徒会広報がいなかつた。二人とも別の用事で生徒会室を後にしていたのだ。

"みほ"は華道を希望した紙を角谷杏に手渡した。

「なんで戦車道、取らないかなー・・・・・・・・」

角谷杏の声が低くなる、"みほ"は気にもせず話の本題に入る。

「私はこの学校で、強制的に戦車道をさせられる意味は無いと思いま

す

"みほ"の顔は何時もの少し臆病なくらいの表情ではなく、真剣な表情で角谷杏に答えた。

「…………まあ、それもそうだけどさ。でもいいの？ 戦車道を取らないと…………、この学校に居られなくしちゃうよ？」

角谷杏は"みほ"に対し脅しているような言葉をかける。

しかし"みほ"も今後の学校生活に関わる事、そう簡単には引き下がらない。

「つ…………!! でしたら理由を教えてください。私にどうしても戦車道をさせようとしている理由を」

「…………」

"みほ"の言葉に、角谷杏は黙りだす。数分間、お互の目を見続ける。

「…………はあー。今日は私の負けだわ」

角谷杏は肩の力を抜き、溜息を吐く。先程までの低い声は戻つて、威圧的な表情もなくなった。

"この話は出来るだけしたくなつたんだけど、結構ショックかもしねいよ？ それでも良いの、西住ちゃん？"

角谷杏が降参したところで、"みほ"も表情が和らぐ。

「はい、理由を教えてください」

「――この学校、廃校になつちやうんだ」

「つ!?」

角谷杏の言葉に"みほ"はショックを受ける。角谷杏は、こゝまで言つたのなら教えるしかないと説明を続ける。

"文部科学省の役人に言われちゃつてね。この学校は活動実績が少なく、生徒の数も減少してゐからつてさ"

「そんな…………!!」

"みほ"は思つた。せつかく戦車道もない学校に転校して、此処での友人も出来たのに廃校なんて辛すぎると。

角谷杏は真剣な顔つきで説明を続ける。

「でも戦車道の実績があれば廃校は免れるらしい。そこで西住流でもある西住ちゃんに、どうしても戦車道をしてほしかったんだ」「そうだったんですか……ですがどうして廃校の事を隠してたんですか？」

「…………どうせだつたら、こんな重荷を背負わずに戦つてほしかったからさ」

"みほ"の言葉に、角谷杏は申し訳なさそうな顔で答える。

実際"みほ"も、いきなり廃校は自分の力にかかるつているなんて言われてはプレッシャーが重すぎる。

暫しの沈黙が続く、その時間は一分や二分と本来は短い時間が今はお互い長く感じていた。

そして"みほ"の口が開き、沈黙が終了した。

「角谷会長…………私、戦車道をやります」

この言葉に角谷杏は驚いた。こんな荷が重い役目を"みほ"が承諾したからだ。

実際のところ"みほ"は相当な覚悟を決めて、戦車道に入ることを決めた。

此処で出来た優しい友人達の大好きな大洗女子学園の為に、"みほ"は戦う覚悟を決めたのだ。

「本当に良いんだね？」

角谷杏は冷静に"みほ"に聞いた。"みほ"は真剣な顔を緩めず答えた。

"はい、こんな私ですが…………お役に立てるよう精一杯努力します"

「…………ありがとう」

——そして現在の試合に至る。"みほ"は角谷杏との会話を思い出していたのだ。

「…………」

「西住殿…………？ どうかしましたか？」

秋山が黙つて考え込んでいる"みほ"を見て、心配そうに声をかける。

"みほ"は秋山の声掛けで、今が試合中のことを思い出して考えるのを止めた。

「う、ごめんなさい。ちよつと考え方をしていて」

「それよりも、本当に大丈夫なの？あの橋を渡るなんて……」

沙織は心配そうに"みほ"に聞く。

"まだ試合も始まつたばかりだから、あの橋の近くにいることはないと思う"

"みほ"は橋を渡る前に双眼鏡でもう一度橋の向こうを確認する。しかし向こうの道には戦車は一両もない。

"大丈夫そう……。五十鈴さん、前進をお願いし——
その時であつた。

ドカンと砲撃の音が後方から聞こえたのだ。そしてIV号中戦車D型に砲弾が直撃するも、少し軽いダメージで済んだ。

"みほ"はキューポラから上半身が出ていたため、体が大きく揺れるが、過去の戦車道経験がいきたのかバランス良く姿勢を維持していた。

"ちよつちよつとみほりん、大丈夫なの!?"

"これくらいは大丈夫！ それよりも……！"

"みほ"は双眼鏡で自分達が向かつてきていた道よりもさらに遠くを覗き、戦車を捉えた。

後方から撃つてきていた戦車の正体は"III号突撃砲F型"であった。

距離が若干遠かつたためIV号中戦車D型には貫通しなかつたものの、ダメージは出ていた。

後退したら確実にIII号突撃砲F型に撃破されてしまう、そう考えた

"みほ"は思い切つて五十鈴に言つた。

"五十鈴さん、前進してください！ 幸い橋の向こうにはまだ戦車はいません!"

「わ、わかりました！」

"みほ"の指示通り五十鈴は戦車を橋へ向かわせる。しかし橋を渡るにしても、五十鈴は操縦手としての経験がなく、間違つて橋から落ちてしまう可能性だつてある。

だが敵戦車が後方から攻撃を繰り返していたら、こちらがやられてしまう。

「(やつてみせます・・・・・!)」

意を決した五十鈴は速度を上げて橋に入る。この時は、砲手である秋山が奮闘していた。

秋山が撃つた砲弾がIII号突撃砲F型に直撃する。しかしガンツと砲弾は弾かれた。

乗つっていた歴女チームの戦車長、エルヴィンも"みほ"と同様にIV号中戦車D型を双眼鏡で捉えていた。

「敵はIV号中戦車D型。車長はあるの西住流だ」

双眼鏡を覗きながらエルヴィンは言う。

「西住流はそんなに強いのか?」

歴女メンバー兼砲手の左衛門佐がエルヴィンに聞く。

「西住流は蝶野教官が説明していた通り、戦車道の三大流派の一つだ。下手に動けばまず勝ち目はない」

「それではどうするぜよ?」

操縦手の"おりよう"が言う。エルヴィンはニヤリと笑つて言つた。

「・・・・・一時的な同盟を組むんだ。それによつてあのIV号を挟み撃ちにして倒せる」

「その顔だと、もう手は打つてあるんだろう?」

歴女チームのリーダー、装填手のカエサルがエルヴィンに言う。

「ああ、相手には西住流や独逸流がいるが。この戦車でどれだけ戦えるか、面白そうじゃないか・・・・・!」

橋を越えて逃げようとする、"みほ"車長のIV号中戦車D型チーム。

しかし"みほ"達は知らなかつた。逃げた先には、さらに強大な

敵が待機していたのだから
・
・
・
・
・
。

模擬試合【中】

——IV号中戦車D型がIII号突撃砲F型と戦闘を繰り広げている最中、"ひとみ"が車長のV号戦車パンターG型はなにをしていたのであろうか？

実は"ひとみ"は密かにIII号突撃砲F型と連絡を取つており、挟み撃ちにする作戦を計画していたのだ。

IV号中戦車D型とて相手はかのパンター戦車G型である。正直あまり勝ち目は見えない。

「向こうの森の奥、その道にIV号D型が来るはずの橋があつたはずだ」"ひとみ"はこの地域の地図を眺めながら言う。

「しかも挟み撃ちの計画場所は平原です、パンターにとつていい的でしかありません」

「それにあのIV号の搭載している戦車砲は、よほど近い距離じゃないとパンターには貫通しないさ」

愛華と栗子が"ひとみ"に言う。

実際その通りであった。IV号中戦車D型の戦車砲は短砲身であり、最低100mぐらい接近しなければ貫通しないのだ。

それにパンター戦車G型は砲塔前面の装甲が110mm、側・後面45mm、車体前面80mmという強固な守りであった。

しかしそれは砲塔と車体前面のみであつて、車体の側面や後面は重量調整の為に薄く、どちらとも40mmであった。

つまりIV号中戦車D型はパンター戦車G型の車体側面、または車体後面を確実に狙わなければ勝ち目はないのだ。

「(今のところ"みほ"以外戦車を上手く扱える生徒はIV号にはいない・・・・。まだ教えられた赤子程度の知識しか持つていないう生徒ばかりだ、こちらには戦車道経験者は私含め2人か・・・・。フフフツこの勝負は貫つたな)」

"ひとみ"は自分達の勝利を思い浮かべてニヤリと笑つた。

「(生前から思つてたけど、總統閣下つてたまに慢心するよなあ。言つたら怒られそうだから黙るけど)」

ホナコは一人、そう思いながら装填の準備をしていた。

……一方その頃、"みほ"達が乗るIV号中戦車D型は"ひとみ"の思惑通りに橋を越えて森を進み速度を上げていた。

どうやらIII号突撃砲F型からの追撃はないようで、"みほ"は五十鈴に戦車の速度を下げるようになに言つた。

しかしその時であつた。まさかの進んでいる戦車の方に向に一人生徒が昼寝をしていたのだ。

「あつ！ 五十鈴さん、停車してください！」

「はい……、あら？ 誰か寝ているようですね」

「あれつて……、麻子じやん！」

沙織が寝て いる生徒をよく見て言つた。

彼女の名は冷泉麻子、沙織の幼馴染で成績学年トップの生徒であつた。

沙織は戦車から下りて寝ている麻子に近づき言つた。

「麻子、なんでこんな所にいるのよ。 授業中だよ？」

「……沙織か、そんな事くらい知つていて」

授業中にこのような場所にいる麻子に沙織は呆れてため息をつく。 その時であつた。

キュラキュラ キュラキュラ

遠くから戦車が近づいてくる音が聞こえてきたのだ。 すぐさま察知した"みほ"は急ぎ麻子に言つた。

「此処は危険ですから、この中に入つてください！」

麻子は言われたとおり戦車の中に入った。

しかし戦車の中に入ると麻子は酸素の薄さで体調が悪くなる。
「さ、酸素が薄い……」

「あー……、麻子は低血圧なんだよねえ」

沙織は困った顔で"みほ"に説明する。

「今は安全な場所にも行けないので、試合が終わつたら戦車から降ろ

しますから、それまで耐えられそうですか?」

「だ、大丈夫……耐えられる……」

"みほ"は切り替えて五十鈴に速度を上げるように伝えた。

遠くから近づく戦車の正体は、バレー部が乗っている八九式中戦車であった。

「M3中戦車っていうのは倒した。次はあのIV号中戦車っていう奴を倒すぞ!」

「キャプテン、あの戦車すごく強そうなんですが……!?」

「こういう時は根性で倒す! この戦車のアタックを信じろー!」

バレー部のリーダーである磯辺典子は戦車長であり装填手でもある。

そして装填された砲弾を砲手である佐々木あけびが狙いを定めて砲撃を開始する。

ドオン!!

八九式中戦車から砲弾が放たれた。その砲弾は見事にIV号中戦車D型へと直撃した。

威力は低いが、この砲撃がIV号中戦車D型の動きを停止させた。何が起きたのかというと……、なんと砲弾は操縦席にある装甲に当たつていたのだ。

そのショックで五十鈴は一時的に気を失ってしまう。

しかもこのタイミングで"ひとみ"達の乗るパンター戦車G型が前方からやってきていた。

「なにやら違うのが混じっているようだが……、どうやらあの戦車のおかげでIV号の動きは止まっているようだ。この機を逃すな!」「「「ヤー!!」」

突然の事態に"みほ"達は混乱する。

五十鈴の気絶、そしてパンター戦車G型の襲来、"みほ"のチームは窮地に立たされた。

「ど、どうしようみぽりん!?」

"みほ"は悩みに悩んだ。すると先ほどまで体調を崩していた麻子が口を開いた。

「……沙織はこの人を見てやれ、私がやる」

「え、ちょっと麻子!？」

麻子が五十鈴を退かすと、マニュアルを読みながら戦車を動かす。戦車のことなど全く知らない麻子が、いとも容易く戦車を操縦しているので"みほ"達は驚愕した。

「麻子、戦車の運転できるの!?」

「たつた今覚えた」

「おお、さつすが学年主席！」

少し酸素の薄さに慣れたようで、麻子の操縦は快適なものであった。

マニュアルを読んだばかりとは思えない運転技術が、敵戦車を動搖させた。

「秋山さん、最初に八九式を撃破します！」

「わかりました！ 任せてください！」

"みほ"の通りに秋山は八九式中戦車に照準を定める。

麻子もそれに合わせて戦車を動かす。

砲身が八九式中戦車に向く、そして遂にIV号中戦車D型から砲弾が放たれた。

ドオーンッ!!

八九式中戦車はIV号中戦車D型よりも前の時代の戦車であり、威力もIV号中戦車D型のほうが上であつた。

そもそも八九式中戦車は戦車対戦車を想定して作られておらず、あくまで歩兵支援用であつた。

戦車対戦車を想定して作られたIV号中戦車D型の砲弾が見事に直撃してしまえば、勝敗は目に見えていた。

八九式中戦車は一発の砲撃で撃破された。

——ちょうどその頃、教官の二人は高い場所から試合の様子を眺めていた。

双眼鏡で見えたものは、八九式中戦車がIV号中戦車D型に撃破されたところであった。

「これで残りは四両……」

蝶野教官は残りの戦車を数えていた。

隣で見ていた山下教官はと、八九式中戦車が撃破されていく様を見て少し悲しい表情をしていた。

「山下さん、どうかしましたか？」

「……改めてみると我が国の戦車は、戦車相手に弱すぎた。性能は良い、しかし少し古すぎたのだ」

山下教官はとても悔しい顔をしている、蝶野教官は黙つて聞いている事しかできない。

「せめて、三式中戦車が前線に配備されいたらまだ……」

「山下さん……」

M3中戦車リーと八九式中戦車が撃破されて、残り四両となつたこの試合で一体どの戦車が勝利するのだろうか……？
この戦いは後半へと続く……。

模擬試合【下】

——2両は撃破されて残る車両は4両、戦闘は森の中で続いていた。

"ひとみ"が乗るパンター戦車からの砲撃に、"みほ"達のIV号戦車は苦戦を強いられていた。

IV号戦車は岩に隠れて応戦を開始するも、パンター戦車の砲撃は岩さえも破壊できそうな威力であった。

"どうしようみぽりん!?"

"このままじゃ……"

急いで砲弾を装填している沙織と、さりげなく目を覚ましていた五十鈴が"みほ"に言う。

だがIV号戦車に更なる不運が訪れた。

"みほ"がパンター戦車とは違い後方に戦車が接近しているのを発見して双眼鏡を覗く、接近していたのはIII号突撃砲であった。

"つ!? いけない、III号突撃砲がきた!"

このままでは挟み撃ちにされてこちらが撃破されてしまう、"みほ"に焦りが見えた。

すると秋山が何かを発見する。

"西住殿、あれを見てください!"

"みほ"は秋山に言われた場所を見た。

そこは森の奥であつたが、奥から素早く戦車が走ってきていた。生徒会が乗っている38(t)戦車である。

しかし生徒会が向かっていたのはIV号戦車ではなく、III号突撃砲にであった。

そして森の中から驚く勢いで現れ、III号突撃砲に接近して側面へと砲弾を放った。

ドガソツ!

III号突撃砲の側面に砲弾が直撃した。

"うわっ、なにが起きたぜよ!?"

"なに?!" 生徒会の戦車が潜んでいたのか! あんな森の奥に!"

III号突撃砲の内部ではエルヴィンが、森から突然現れた38(t)戦車に驚愕していた。

「まざいぞ……、かなりいいところに直撃した。このままでは……！」

「おりよう、右に旋回してくれ！」

エルヴィンはおりよう指示し、戦車を右に旋回させる。

だがそれはもう遅かった、38(t)戦車から再び砲弾が放たれる。

「しまつ——」

ドガーンツ！

——III号突撃砲が撃破された。

これはパンター戦車の5人を驚かせ、すぐさま38(t)戦車に砲身を向けた。

「まざい！ 我らのパンター戦車はIII号突撃砲と同じく側面に弱い、何としても38(t)戦車を撃破するのだ！」

「〔〔〔j^ャa!!〕〕〕

38(t)戦車にパンター戦車の砲弾が放たれた。

なんとか38(t)戦車は砲撃を避けてパンター戦車に接近していく。

そしてパンター戦車のエンジン部分を砲撃する。

——みほの視点では、パンター戦車の注意が38(t)戦車に引き付けられて、IV号戦車へ向かっていた砲身も別方向へ動いていた。

「今ならいける！ 冷泉さん、あの大きな戦車の側面に急いで迎えますか？」

「いけるぞ」

「秋山さん、到着したらパンターの側面に砲撃をお願いします！」
「わかりました！」

IV号戦車は動き出し、パンター戦車の側面へと向かっていった。
ドガーンツ！

ちょうど38(t)戦車がパンター戦車によつて撃破されていた。

「よし、あとは急いでIV号を——」

「ヒューラー 総統!! IV号が側面に接近して います!!」

「なにつ!? 早く砲身をIV号に向けろ!?!?」

「ダメです、流石に間に合いません!」

アイケ 愛華が言つた瞬間、勝敗は決まろうとしていた。

IV号戦車から砲弾が側面に向けて放たれたのだ。

ドガアアンツ!

——38 (t) 戦車のエンジンへの砲撃、そしてその後IV号戦車が側面へと砲撃をしたため、パンター戦車は動かなくなつた。

パンター戦車のエンジンは、ぷすぷすと煙が出でている。

これは正真正銘、戦闘不能である。

『V号戦車パンターG型、戦闘不能。 IV号戦車の勝利!!』

蝶野が通信で生徒全員に告げる、こうして大洗女子学園初の模擬試合は終わりを迎えた。

正体を知る者

——模擬試合は"みほ"達IV号戦車の勝利に終わった。

故障した戦車は全て自動車部が修理するために回収していき、各生徒はガレージの前に集合した。

これからも訓練を怠らないようにと生徒達に伝えて、今日の任務を終えた山下は宿泊している場所に帰つていった。

蝶野も"みほ"と"ひとみ"に挨拶をして宿に帰宅した。各生徒も下校時刻なのでそれぞれ帰宅していく、転生者組も大体帰宅したので残つたのは"ひとみ"ぐらいであった。

「さて、では私も帰るとするか」

帰る支度をしようと学園に戻ろうとする、すると「待つてくれ」と"ひとみ"は声をかけられた。

後ろを振り向くと、そこにいたのは歴女のエルヴィンであつた。

「君は確かエルヴィンだつたな、私に何か用か?」

「……単刀直入に聞く」

「——貴方は、転生者だな? アドルフ・ヒトラー」

放された言葉は"ひとみ"の予想をはるかに超えていた。

〔〕

まるで二人だけ時が止まつたように、風がピタリと止んだ。

"ヒトラー"は驚き目を見開く。

どちらかが口を開くまで風は吹いてこなかつた、そして先に口を開いたのは"ヒトラー"であつた。

「……何故、そう思う?」

エルヴィンは今喋つてゐる相手の雰囲気が変化したのに気づいた。冷酷な目、何処か普通の人間とは違う何か重みのある言葉遣い。間違いない、この人がヒトラーだ。

そう確信したエルヴィンは、口を開いて言った。

「貴方は模擬試合が始まる前に言つていた。ヒューラー Sieg Haier と、それに共に乗つっていた人達は貴方を總統と呼んでいた」

「……驚いたな、細かい発言まで覚えているのは素晴らしいことだ」
話していてもヒトラーの表情は変わらない。

「お察しの通り、私は転生したアドルフ・ヒトラーだ」

「やはり……！」

「だが解せない部分がある、何処から転生者という情報を知った？」
鋭い目つきでエルヴィンを睨む、エルヴィンは黙りこくつていた。

「……今君が聞きたいのは多分、私が何を企んでいるのかということだ
ろう」

そう言つて"ヒトラー"はゆっくりとエルヴィンに近づく。
目つきが戻り、多少の溜息を吐きながら困っている姿はエルヴィン
を驚かせた。

先程までの雰囲気が無くなつて、エルヴィンはそう気づいた。
「私は今世を楽しい事に使いたい。 これは紛れもない本心だよ」
「……え？」

エルヴィンは呆然としているが、"ひとみ"は話を続ける。

「転生前、ドイツ国民が私を熱狂的に支持した。 しかし終われば悲
しい結末だった」

「戦争もユダヤ人迫害もある時では必要な出来事だった。 時代が我
らに命令したのだ」

「自決し転生した私は"みほ"と"まほ"に仁愛を教えてもらつた。
両親の教育が私を変えたのだ」

"ひとみ"の言葉を聞いてエルヴィンは驚いている。

そしてエルヴィンは、この人は何も企んでいないと感じた。

「……私は、転生したこの人生を無下にする気はないよ。 わかつた
かな、エルヴィン？」

「……申し訳ない、そこまで改心しているとは思わなかつた。 無礼
を許してほしい」

エルヴィンは"ひとみ"に頭を下げる。

"ひとみ"は申し訳なさそうに頭を上げさせる。

「よせよせ、私なんかに頭を下げてどうする？ 何にもならんぞ」
「いや、新しい人生を楽しんでいる方に無礼を働いてしまつた。 今

度お詫びの品を用意しよう

「まあ、そこまで言うのなら……。 じゃあ今度こそ私は帰るぞ、じゃあな」

そういうつて"ひとつ"は学園に戻つていつた。

「…………らしいですよ？ 将軍」

「——

一人残つたエルヴィンが、近くの木にひつそりと隠れて聞いていた者に声をかける。

そして穏やかに笑いながら現れたが、この少女の制服は黒森峰女子園のものであつた。

金髪の地毛で青い目の軍人のような気質の少女は、口を開いた。

「そ、うか、總統閣下は改心してくれたのか……あれなら大洗女子学園は大丈夫だろう」

そして自動車部がガレージに運んでいるIV号戦車を見て、少女は言つた。

「ありがとう、西住みほ副隊長。 總統閣下を変えてくれて……」

少女はそう言つてガレージ前から去つていく。

そして彼女の制服の右胸にネームプレートが付いている。

名前はフリードリヒ・ヨハネス・オイゲン・ロンメル、"ひとつ"と同じ転生者であつた……。

第二章 「練習試合 聖グロリアーナ女学院編」

練習試合の決定 作戦会議

——大洗女子学園が戦車道を再開して1週間が経過した。

訓練の日々を過ごしているが、慣れてくるもので着々と戦車の基本が生徒に身についてきていた。

"ひとみ"達も元々がドイツ人だったからか、きびきびと訓練を行っている。

それが他生徒の憧れにも繋がり、他の戦車長もパンター戦車に乗る5人を参考にするほどであつた。

誰よりも目を輝かせたのは一年生達であつた。

一年生が乗るM3中戦車リーの車長、澤梓は"ひとみ"の几帳面さ、"みほ"の心優しい性格を参考にして一年生チームの訓練を行っていた。

そんなある日の事――。

「来週に他校と練習試合することになったから、その詳細を発表するよー」

『ええーー!』

唐突に杏から戦車道の生徒達に伝えられる。

生徒達も動搖しているが、これには"ひとみ"達5人も驚きを隠せない。

「今回の試合の相手は聖グロリアーナ女学院だ、会長自ら試合の話を持ち掛けてきてくださった」

「そういうことー」

生徒達は聖グロリアーナ女学院がどのくらい強いのかは、訓練の際確認した雑誌や前の大会などの映像を確認したので知っていた。

最初から強豪校である相手と戦うなど無謀だと思っていた。

しかし決定した以上、聖グロリアーナ女学院と戦わなければならぬ。

い。

これは大洗女子学園が戦車道を再開したことを証明するための試

合なのだ。

ここで河嶋の試合の説明が始まる。

「今回行う試合内容は殲滅戦だ。聖グロリアーナ女学院は強豪校だが、戦車道の強豪校がどれくらいのレベルかを経験するのが目的でもある。各車長は今日の訓練が終わり次第に生徒会室に向かうように、試合への作戦会議をするからな」

『はい！』

各車長である西住みほ、独逸ひとみ、磯辺典子、カエサル（車長はエルヴィンだが、リーダーがカエサルなのでこちらが出席）、澤梓は同時に返事をする。

「そして最後に、これは練習試合であつても慢心をしてはならない。訓練でした事をよく思い出して試合を行つてくれ、以上解散！」生徒達はぞろぞろと別の行動を開始する、普通に帰宅や戦車の手入れなど様々だ。

——場所が変わり、此処は生徒会室。

"ひとみ"達は来週の試合の為に作戦会議を行つていた。
「試合の場では崖や荒野があるという、そこでなんだが……お前達の意見を聞きたい」

河嶋は各車長に作戦意見を問うた。

最初に出た案は典子の根性論だつたので却下された。

次に出たのはカエサルと"ひとみ"の優勢火力で敵を撃退するというものであつたが、そもそも火力が出せるのがⅢ号突撃砲とⅣ号中戦車とパンター戦車のみだったので却下された。

梓はそれらの作戦のメモを取つていた。

「うーん、西住は何かあるか？」

河嶋が"みほ"に問う、"みほ"は少し考えて試合場の地図を確認する。

「では私が乗るⅣ号中戦車が囮に出て、市街地におびき寄せます。皆さんは市街地に隠れて、合図を出したら一斉に攻撃を開始するのはどうでしょう？」

「しかしそれでは、攻撃が失敗した場合逆に攻撃を食らうんじゃないのか？」

"みほ"の作戦に河嶋が質問をする。

「確かに今の状態では火力不足でもあります、だから市街戦にするんです」

"みほ"の言葉に杏は「なるほど」と声を出す。

「つまり西住ちゃんは、まずは街の中で潜んで撃つて、隠れてをするつて言いたいんだね？」

「はい、今の私達には戦車道の経験が必要です。 ですので此処は各戦車の性能を考慮して戦い、勝利を掴まなければいけません」

これには各車長達も納得する、河嶋も頷いて口を開いた。

「……確かにその通りだ。 わが校はまだ他校の試合をしていない、では今作戦の指揮官は西住が頼む」

河嶋の言葉に"みほ"は頷く。

「わかりました。 出来る限り最善を尽くしてみます」

「ああ、あと負けたらあんこう踊りをしてもらうからねー」

「「「え、？」」

「……？」

——こうして作戦会議は終了して各車長は帰宅していくた。

"みほ"は夜の太平洋を眺めていた。

そこへ偶然通りかかった"ひとみ"がやつてくる。

「珍しいな、こんな時間に」

「うん、ちょっと心配で……」

「……みほ、今回の試合は勝てるか？」

"ひとみ"の言葉に"みほ"は少し黙る、月に照らされた水平線を眺めながら"みほ"は口を開いた。

「わからない、だけど勝たなくちゃ……練習試合で負けたら、大会なんて優勝できないしね」

「……そうだな」

——訓練を続けて数日が経ち、試合の前日となる。

学院長の訪れ

——試合の日がやつてきた。

大洗女子学園に対するは強豪校の聖グロリアーナ女学院、勝機はないが、大洗生徒は訓練の成果を見せるときと士気は高ぶっていた。初めての強豪校との戦いに期待を寄せながら、学園艦は港に停泊した。

学園艦から降りた"ひとみ"達は、久しぶりの陸地に心躍つていた。

「久しぶりの陸地だな、栗子」

"ひとみ"が自販機で飲み物を買つている栗子（クビツエク）に言う。

「ああ、この十数年ですっかり第二の故郷だ」

栗子はそう言いながら、"ひとみ"に飲み物を軽く投げる。

「おつとつと……、お前よりもよつて炭酸のやつを投げたのか？」

「ちえつ、もうバレたか……炭酸があふれる姿が見たかつたんだけど」

二人が軽い会話を続けていると、向こうから愛華（アイケ）が歩いてくる。

しかし愛華の顔は困惑した顔をしていた。

「總統、どうやら聖グロリアーナ女学院の方が總統（ヒューラー）にお会いしたいそ
うで……」

「私に？ 知り合いなどグロリアーナには居なかつたはずだが……」

「いえ、あの……なんと説明すればいいやら」

愛華（アイケ）が説明に困つていると、愛華（アイケ）の後ろから声が聞こえてきた。

「君が独逸ひとみ君かね？」
「なつ……！」

現れたのはシルクハットをかぶつた紳士的なイギリス人、小太りで歳を少しどつたその姿が"ひとみ"には見覚えがあった……。

「いや、私達の間ではこう呼ぶべきかな？ アドルフ・ヒトラー」「チャーチル……！」

——そう、このイギリス人は聖グロリアーナ女学院の学院長であり、第二次世界大戦のイギリス首相 Winston · Churchill であつ

た。

「……愛華^{アイケ}、会いたいと言っていたのはコイツだな?」

「はい、しかし生前と全く同じ姿だとは……」

「転生したら歳も姿もある頃と同じだったものでね、他人の空似で通してたんだが……最近になつて戦車道連盟に正体がバレてしまつてね」

そう言つてチャーチルは葉巻を吸う。

「いずれかは君も戦車同連盟に正体がバレるだろう、現に各校にいる転生者は半数が正体を掴まれた」

……各校に転生者が多く存在する事、そしてその情報を既に掴んでいる事に"ひとみ"達は驚愕する。

「私は君達に忠告しにきただけだ。 正々堂々、ダージリン達と戦つてくれよ」

「あ、ああ……いや、ちょっと待つてくれ!?」

「ん、何かね?」

「どうして私の事を戦車同連盟に報告しない? 連盟の奴らには重要な情報の一つのはず、何故だ?」

「ああ、そのことかね」

"ひとみ"の質問に対し、チャーチルはすぐに答えた。

「この新しい人生を楽しんでいる、そう君の生前の部下に聞いてね」「私の、部下に……?」

するとチャーチルは、何かを思い出したように腕をポンつと叩いた。

「そういうえば、その部下から伝言を預かっていたよ」

そう言つて、チャーチルは伝言を"ひとみ"に伝える。

『……総統^{ヒューラー}。 我が校、黒森峰と相対する日を待つています。 砂漠

の狐の力、お見せしましよう』

「……と伝えてくれとな、では君達との試合をじつくり見ていくとしよう」

チャーチルはそう言うと、聖グロリアーナの元へ帰つていった。

取り残されたのは"ひとみ"と栗子、愛華の三人であつた。

"……砂漠の狐か、私に再会し話をする資格があるのだろうか……

"ひとみ……

"思い返すと私は、彼の人生を大きく変えてしまつた……そんな私を、ロンメルは再び受け入れるのか

——しばらく静寂の時間が過ぎていった。

ずっと目を閉じていた"ひとみ"を見て栗子達は、ただ黙つて見ている事しかできない。

……しかし、"ひとみ"の顔は笑っていた。

"……そういえば、ロンメルの頼みに応じた事は殆どなかつたな。なら応じるとしよう、二度と私に歯向かわないよう確実に勝利してやろうじゃないか、なあお前達？

"ひとみ"は二人に視線を移す。

"私もロンメルと戦えるのか、腕が鳴るな！

愛華は楽しそうに答える。

"なるほど、じゃあ"ひとみ"の友人として、その勝負を見届けようかな"

栗子は興味深そうに言つた。

"ゲツベルとホナコ、隠れて聞いてないで出てこい"

そう言うと、近くの物陰からゲツベルとホナコが申し訳なさそうに現れた。

"いやあー……出ていくタイミングを見失いまして

"どうかホナコ、お前ロンメルがいるの知つてたな？

"すみません、ロンメル将軍が秘密にしててくれつて言われてまして

……

"ひとみ"の言葉にホナコは謝りながら返した。

やれやれ、と"ひとみ"が言う。

"てことは"みほ"も同様に秘密にされてたんだろうな、それなら仕方がない"

改めて"ひとみ"は、同じV号戦車に乗る仲間達の目を見た。
それぞれの目には、目標に向かい結束した目をしていた。

"ひとみ"は一度目を閉じて思つた。

「（私はもう間違えない……再び皆に相応しいと思われる人間になりたい）」

——彼女のこの気持ちは、変わる事のない目標になつた。
もう一度やり直したい、その思いは今確信へと変わつたのだ。
そして、"ひとみ"は目を開いて仲間達に聞いた。

「……お前達に聞きたい。 再び私の……いや、私と共に来てくれるか？」

"ひとみ"の問いに、仲間達は即座に答えた。

『もちろん、共に行きますとも！』

「……ありがとう。 よし、もうすぐ聖グロリアーナ女学院との練習試合だ！ チャーチルに一泡吹かせてやるぞ！」

『おおーっ!!』

——いよいよ始まるのは大洗初の練習試合、はたして"ひとみ"達は勝利することが出来るのだろうか？

試合相手へ挨拶

——試合が始まる30分前、私達は試合相手の聖グロリアーナ女子院に挨拶へ赴いていた。

やはりグロリアーナの方が戦車道の生徒の数が多い、さすが強豪校というだけある。

しかも服装なども統率があつて且つ、不思議と此処の生徒にも転生者が複数存在しているのを感じた。

相手の隊長へ挨拶に向かおうとしたその時、一人の生徒が私に近づいてきた。

茶髪で少し長い髪を後ろで縛つていて、鋭い目をしていた。
格好もまるで将校の軍服である。

多少の警戒をしながら、私は近づく生徒を見る。

「独逸家の長女、独逸ひとみで間違いありませんか?」

「……そうだ、私が独逸ひとみだ。 試合前に挨拶に来た」

そう答えると、生徒は少し考えたのち口を開いた。

「やはりそうでしたか。 では隠し事はいりませんな」

「……という事は貴女も転生者か」

答えると生徒は「yes」とにこやかに言つた。

同じ転生者という事で私は少し安心する。

「私は……まあ、もう存じてるかとは思うが、アドルフ・ヒトラーだ」「もちろん、チャーチル殿から聞いているさ」

そう言つて生徒は姿勢を整えて敬礼をする、そして自らの名を名乗つた。

「私はジョン・モナシュ。 将軍をやつていた、一人のオーストリア人です」

——その瞬間、私の時が少し止まつたように感じた。

今なんと? ジョン・モナシュ?

ジョン・モナシュ将軍と言えば第一次世界大戦で一番有名なオーストリア人、そしてその大戦でも最高の将軍と言われるほどの人物

だつたはず……。

歩兵を重視するにも関わらず、多種多様な兵器も巧みに利用し、アミアンの戦いを勝利に導いたあのジョン・モナシユ将軍だというのか！？

「……あのー、どうかなされましたか？ 震えておりますが」

そう思つた途端に震えが出てきた、助けてクビツエク。

いくら元敵国とはいえ、自分も参加してた戦争で有名な将軍が出てきたら誰でも震えると思う。

今思うとなんで私はあの頃、かのマッケンゼン元帥を利用していたんだと、震えが加速してきた。

「い、いえ大丈夫です。 驚いてるだけなので……」

私は震えながらモナシユ将軍に言う。

「そうですとも、ですのどうか私にサインください」

……いつの間にか愛華^{アイケ}が現れて、モナシユ将軍にサイン色紙を構えていた。

「え、まあ構いませんが……はい、どうぞ」

「ありがとうございます！ 大事にします！」

「ちよつと待てい愛華^{ヒューラー}！ 何時から聞いていたんだ!?」

「ずっとですよ總統^{ヒューラー}！ 名前聞いた瞬間に事前に持つてきてるサイ

ン色紙を取り出しましたもん！」

「お前そんな感じだつたか!？」

「私だつて大戦に参加してたんですよ、こんな凄い将軍が近くに居たらサインくらい欲しいでしようが！」

私と愛華^{アイケ}が言い争いしていると、モナシユ将軍が困つた表情で口を開く。

「いやいやお一方、私は一介の将軍にすぎませんよ。 私の力だけで

はなく、優秀であつた兵士達のおかげであります」

謙虚とは聞いていたが、將軍では類を見ないほどの謙虚さだと私と愛華^{アイケ}は驚愕する。

ドイツ軍人では見たことがないくらいだ。

「それよりも、早くダージリン殿に挨拶に行かれてはどうですか？」

多分待つてますよあの人

「おお、 そうだつた！ では先に私にもサイン頂ければと……」
「^{ヒューラ}總統も人の事言えませんよ、これ……」

私もモナシユ将軍からサインを頂いて、グロリアーナの隊長である
ダージリンへの挨拶を済ませたのだつた……。
※みほ達は既に挨拶を終わつていた。